宮脇典彦先生の定年退職をお祝いして

経済学部長　竹　口　圭　輔

宮脇典彦先生は，1978年に慶應義塾大学工学部を卒業され，1983年に同大学大学院工学研究科博士後期課程を単位取得満期退学されました。その後，渡米しロチェスター大学のWilliam E. Simon 経営管理大学院にて学ばれ，1986年にロチェスター大学よりPh. D.（経営管理学博士）を授与されています。

同年４月に本学経済学部研究助手として着任され，1987年に助教授，1992年に教授に昇進され，現在に至ります。約40年もの長きにわたり，経済学部で教育研究に従事されてこられました。その間，数理統計学やデータ解析，コンピューター入門などの授業を主に担当され，経済学部における統計・情報教育分野に大きな貢献をされてきました。

振り返ると，先生の在職期間は情報通信技術の急速な発展と普及の時代でもありました。着任当時の1980年代はNECのPC-98シリーズが主流であり，商用インターネットも存在していませんでした。そのため，学生たちにとって，コンピューターはまだまだ身近なものではなかったはずです。そうした時代に統計・情報教育を担当されることは，今とは違った難しさがあったことでしょう。困難な中でも，データを扱うことの重要性と楽しさを学生に伝え，多くの卒業生に未来を切り開く力を授けたことと思いま

す。

その後，1990年代に入るとWindowsの登場とともにパソコンの普及が進みましたが，大学生が個人で所有するようになったのは1990年代後半頃だったでしょうか。当時でも，学生の多くはまだコンピューターに慣れておらず，キーボードに触れたことすらない者も多かったはずです。引き続きデータを用いて経済・社会事象を分析する視点や方法を教えられる傍らで，先生ご自身も，技術革新が急速に進む状況だったり，イノベーションのダイナミズムを学生とともに楽しんでおられたのではないでしょうか。

今世紀に入ってからは，インターネットの高速化はもちろんのこと，携帯電話やスマートフォンといったデバイスの普及も進みました。そんななか，先生がたびたびテレビに出演されたことで，統計学やデータ解析に興味を持って本学を目指してきた学生も多かったはずです。一方で，ここ数年は，いわゆる「デジタルネイティブ」と呼ばれる，インターネットやパソコンのある環境で育った学生が中心になっていたと思います。実際，そうした学生に対応すべく先生も教育スタイルの変化を求められ，ご苦労も多かったのかもしれません。

データサイエンスという言葉が注目される昨今ですが，宮脇先生はまさにこの40年間にわたり本学部のデータサイエンス教育のパイオニアとして，その礎を築かれてきたんだなと改めて実感しております。

また，教育研究活動だけでなく，先生は経済学部の運営にも多大な貢献をされました。1996年度には教授会副主任，2001～2002年度には教授会主任，そして2007～2008年度には経済学部長を歴任されました。私が着任したのは2004年度ですが，先生が学部長を務めていた当時は，シビアな学生問題が多かった時期に重なっていたかと思います。

「ディシプリン」という言葉は，われわれ大学教員にとって「専門領域」や「学問分野」を思い起こさせますが，先生は「規律」という意味でのディシプリンを経済学部にしっかりと根付かせてくださいました。難しい状況下においても，先生をはじめ当時の執行部は規律としてのディシプリンを重んじ，諸問題に対して丁寧かつ厳粛に対応された結果，経済学部はその後，穏やかな時期を迎え，学問領域としてのディシプリンを維持できたと感じています。

さらに，2011～2013年度には総長室長も務められました。当時の総長であった故・増田壽男先生の右腕として大学経営にも貢献されました。奇しくも，東日本大震災直後という非常に困難な時期と重なっていただけに，学部運営以上に厳しい状況下での舵取りだったかと推察されます。未曾有の災害を前に学生・教職員が不安を覚えるなか，大学としての規律をみごとに維持され，速やかに落ち着いた研究教育環境を整えてくださったことに感謝しております。

上記のように多忙な身であったにも関わらず，2008年度からは本学体育会水泳部の部長も務められました。100年以上の歴史を持つ同部を率い，2009年には30年ぶりにインカレ男子総合優勝を果たされただけでなく，北京，ロンドン，リオ，東京，パリと，途切れることなく多数のオリンピアンを輩出されてきたことは驚き以外ありません。まさに「法政スポーツ」の体現者として，学生アスリートの育成のみならず，一般の学生や本学OBOGにも大きな勇気を与えてこられたことも先生の大きな功績でしょう。

先生の活躍の場は大学にとどまることなく，2001年から現在に至るまで，東京家庭裁判所八王子支部（現立川支部）の調停委員も務められ，家事調停という非常にデリケートな現場で当事者間の話し合いを円滑に進める役割を果たされています。本学学生にとどまらず，先生のお力によって

救われた方が社会にも多数おられることでしょう。実際，2021年には，長年にわたる公共社会福祉への貢献が評価され，藍綬褒章を受章されています。

以上のように，宮脇先生は教育研究，大学運営，社会貢献という大学教員に求められる役割を高いレベルでバランスよくこなしてこられました。私たち後輩にとって，先生の功績は大きく，時にプレッシャーすら感じますが，今後とも引き続き多方面にわたりご指導を賜れれば幸いです。

宮脇先生，39年間本当にお疲れ様でした。経済学部を代表して心より感謝申し上げます。どうぞお身体に気をつけて，末永くご活躍ください。